

## 美術教育における学内ギャラリーの 存在意義と役割に関する報告

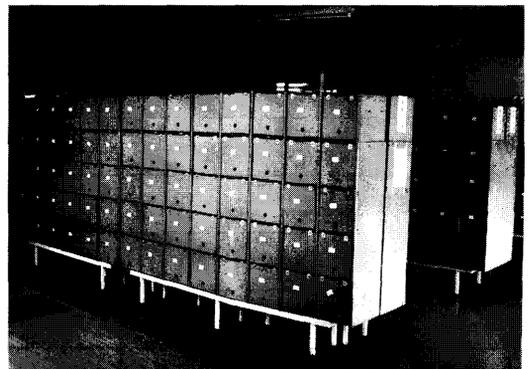
齊藤 克幸\*

### はじめに

ギャラリーH (アッシュと読む) は、本学3号館玄関正面にある開放型のギャラリーで、1997年に新設された。本学はかつて上履き制を採用していたため、各棟玄関正面に下足箱が設置してあったのだが、1997年当時、古い木製下足箱を廃棄してスチール製のロッカーと交換する際に、いっそのことならロッカーの設置位置を若干移動して、その空間をギャラリーとして作ってはどうかという美術科教員のアイデアから誕生したものである。3号館に本学美術科の実習教室が集中しているため、その玄関正面がギャラリーの立地として好都合でもあった。そのため3方向に壁面を増設してコの字型とし、ビニールクロスを貼って仕上げ、ピクチャーレールやスポットライトなど最低限必要な設備を新設してギャラリーとしての体裁を整えた。なお「H (アッシュ)」の呼称は、比治山・広島・人間などの頭文字「H」のフランス語読みによるもので、美術科教員によって命名された。なお「H」は、正式には「a/」で表記する。

美術教育において、単に作品を制作して終わるだけではなく、公的な場所で作品を発表し、第三者の批評を仰ぐことが貴重な経験であることは言うまでもない。このことは、本学美術科の卒業要件として卒業制作2単位が必修である所以でもある。しかし卒業制作展における最後の発表だけではなく、在籍途中に貸画廊などで、個展やグループ展などを開催することは、キャプション・ダイレクトメール・チラシなどのデザインや準備から、作品の展示レイアウトに至るまでを総合的に計画せねばならず、美術科学生にとって極めて良い勉強となることは以前から指摘されていた。しかしそのための適当なスペースが無かったために、当時まで学内ギャラリーの類

いは存在せず、ただ廊下壁面に作品を展示するに止めていた。もちろん以前から市中心部の貸画廊で個展やグループ展を実施する学生も少なからず存在していたが、数万円から十数万円の賃料は学生にとって決して安くなく、おいそれとは手出しできない。その点、学内ギャラリーであれば無料で、搬入出や当番などの手間も省け、比較的容易に個展やグループ展に取り組むことができるから、さほど積極的ではない学生でも展覧会のイロハを体験することができる。また授業と発表を関連づけ有機的な美術教育に発展させることもでき、発表を目標にすることで学生の制作意欲が向上し、責任感が生じるなどメリットは大きい。



木製下足箱が設置してあり、ギャラリーHができる以前の3号館玄関正面 (写真 齊藤)

### ギャラリーHの概要

ギャラリーHは正面が開放されたコの字型で、間口7.56m、奥行4.14m、天井高2.76m。3方の壁面最上部

\*美術科

表1 ギャラリーH2004年度利用状況

利用期間	展覧会名	展示内容	点数	利用者(数)
4月12日～16日	二人展	イラストレーション	計10点	卒業生(2名)
4月19日～23日	デザインコース 1年次 生作品展	色彩平面構成(授業作品)	計16点	1年次生(16名)
4月26日～5月7日	日本画コース 2年次 生作品展	日本画(授業作品)	計20点	2年次生(20名)
5月10日～14日	洋画コース 2年次 生作品展	油彩画(授業作品)	計14点	2年次生(14名)
5月17日～21日	彫刻コース 2年次 生作品展	彫刻(授業作品)	計11点	2年次生(11名)
5月24日～28日	デザインコース(平面) 2年次 生作品展	平面作品(授業作品)	計16点	2年次生(16名)
5月31日～6月4日	デザインコース(染織) 2年次 生作品展	染・織(授業作品)	計12点	2年次生(12名)
6月7日～11日	デザインコース(陶芸) 2年次 生作品展	陶芸(授業作品)	計11組	2年次生(11名)
6月14日～18日	写真部による写真展	写真	計18点	専攻科生(3名)
6月21日～25日	二人展 me	油彩画・半立体作品・壁面表現・CGグラフィックス・イラストレーション	計49点	1年次生(2名)
6月28日～7月2日	楽描き	油彩画・写真・グラフィックス・CGグラフィックス・イラストレーション・オブジェ・インスタレーション・アクセサリー	計39点	2年次生(7名)
7月5日～9日	専攻科8人展∞ (展示計画研究)	彫刻・染め・イラストレーション	計8点	専攻科生(8名)
7月12日～16日	ミドリムシ展 (展示計画研究)	日本画・油彩画・平面作品・彫刻・織・陶造形・半立体	計15点	専攻科生(8名)
7月20日～23日	ちしお展 (展示計画研究)	日本画・油彩画・彫刻・立体	計8点	専攻科生(6名)
7月26日～30日	日本画コース2年A	日本画(授業作品)	計10点	2年次生(10名)
8月2日～6日	日本画コース2年B	日本画(授業作品)	計13点	2年次生(13名)
10月4日～15日	木本雅典 滞仏デッサン展	裸婦デッサン	計32展	教員(1名)
10月18日～29日	造形作家 ジェフ・モレノーの仕事	ドローイング	計6点	特別講師(1名)
11月1日～6日	b-cafe展	写真・ポストカード・グラフィックス・Tシャツ・インスタレーション	計29点	2年次生(8名)
11月8日～12日	専攻科生による オーバード展	パッケージデザイン・グラフィックデザイン	計18点	専攻科生(13名)
11月15日～19日	向井展	彫刻	計5点	2年次生(1名)
11月29日～12月3日	三人展ポップ	イラストレーション・写真	計42点	1年次生(3名)
12月6日～10日	流星百行展	油彩画・水彩画・コラージュ・イラストレーション	計6点	2年次生(4名)
12月13日～24日	Xmas冬のテーマminiature 作品展(表現研究Ⅱ)	日本画・油彩画・ドローイング・彫刻・半立体・染めグラフィック・陶芸	計43点	専攻科生(21名)
1月5日～15日	ワヤワヤ日和展	油彩画・写真・イラストレーション・コラージュ・壁面表現	計10点	2年次生(1名)
1月16日～29日	洋画コース 1年生 6人展	油彩画・水彩画・イラストレーション	計11点	1年次生(6名)

## 美術教育における学内ギャラリーの存在意義と役割に関する報告

表2 ギャラリーH2005年度利用状況

利用期間	展覧会名	展示内容	点数	利用者(数)
4月9日～20日	南阿蘇スケッチ展	水彩画・ドローイング	計21点	2年次生(4名) 教員(3名) 卒業生(5名) その他(9名)
4月25日～5月6日	デザインコース 1年次 生作品展	色彩平面構成(授業作品)	計16点	1年次生(16名)
5月9日～13日	日本画コース 2年次 生作品展	日本画(授業作品)	計17点	2年次生(14名)
5月16日～20日	からまつ合宿 美術科 1年次 竹の造形作品展	立体	計8点	1年次生(全員)
5月23日～26日	彫刻コース 2年次 生作品展	彫刻(授業作品)	計11点	2年次生(11名)
5月27日～6月1日	洋画コース 2年次 生作品展	洋画(授業作品)	計21点	2年次生(12名)
6月2日～7日	デザインコース(平面) 2年次 生作品展	平面作品(授業作品)	計16点	2年次生(16名)
6月8日～13日	デザインコース(染織) 2年次 生作品展	染め(授業作品)	計12点	2年次生(12名)
6月14日～17日	デザインコース(陶芸) 2年次 生作品展	陶芸(授業作品)	計70点	2年次生(7名)
6月20日～24日	めがね展 (展示計画研究)	日本画・洋画・彫刻・オブジェ・壁面立 体・イラストレーション・ポストカード	計28点	専攻科生(11名)
6月20日～24日	赤い実弾けまくった展 (展示計画研究)	日本画・イラストレーション・オブジェ・ 陶芸・タペストリー	計13点	専攻科生(11名)
7月4日～8日	MIXArt展	洋画・彫刻・立体・平面作品・イラストレ ーション	計17点	2年次生(6名)
7月11日～16日	nanard展	壁面表現・オブジェ・イラストレーション	計14点	1年次生(2名)
7月19日～22日	MIXArt 2展	日本画・洋画・デッサン・壁面表現・イラ ストレーション	計24点	2年次生(3名) 専攻科生(4名)
7月25日～29日	専攻科日本画専攻 作品展	日本画	計12点	専攻科生(7名)
8月1日～9月30日	オープンキャンパス用 特別展示	日本画・洋画・彫刻・平面・染織・陶芸	計20点	2年次生(20名)
10月3日～7日	和田貴子個人展	洋画・イラストレーション	計22点	2年次生(1名)
10月11日～14日	金子徹展	洋画・デッサン	計7点	2年次生(1名)
10月17日～21日	写真展	写真	計22点	専攻科生(1名)
10月24日～28日	多重人格展	洋画・ドローイング・インスタレーション	計27点	2年次生(1名)
10月31日～11月4日	はらり、花落ち展	日本画・洋画	計10点	専攻科生(1名)
11月7日～13日	JAPANTEX '05 学内展	染めと織による空間表現	計1点	専攻科生(3名)
11月7日～13日	はらり、花落ち展 パート2	写真・イラストレーション	計46点	専攻科生(1名)
11月21日～25日	はらり、花落ち展 パート3	写真・イラストレーション	計37点	専攻科生(1名)
11月28日～12月2日	専攻科平面二人展	イラストレーション	計24点	専攻科生(2名)
11月28日～12月2日	想 川本裕子作品展	彫刻・ドローイング・詩・レポート	計20点	研究生(1名)
12月12日～16日	専攻科生による オーバンド展	パッケージデザイン	計19点	専攻科生(19名)
12月19日～23日	二人展	イラストレーション	計26点	2年次生(2名)
1月10日～3日	表現研究Ⅱ作品展	イラストレーション・半立体オブジェ	計15点	専攻科生(15名)
1月16日～20日	生活学科 授業課題作品	パネル展示	計6点	生活学科 2年次生(16名)
1月23日～27日	B! B! B! BIRTHDAY PARTY	イラストレーション・オブジェ・陶芸・ 染め・インスタレーション	計14点	2年次生(7名)

に作品吊り下げ用ピクチャーレールが、天井に日の字型にスポットライト用ダクトレールが取り付けられている。電源コンセントが向かって左奥隅に二口。壁面はツヤ消し白色ビニールクロス貼り。床は50cm角の灰色タイルカーペット貼りである。加えて幅1.8m、奥行0.7m、高さ2.48mの箱状で、同ビニールクロス貼りで最上部全周囲にピクチャーレールを取り付けた可動式壁面がある。これはキャスター式で自由に移動でき設置場所を問わないため、展示内容や都合によって空間を仕切ったり変化させることができるため重宝している。ただし展示に使用しない場合は、置き場所に困るなどの欠点もある。また作品吊り下げ用ワイヤーや予備のスポットライトなどの備品、さらに展示用の針・釘・ヒートン・ガンタッカー・ベンチ・金槌・ニッパなどを収納した工具類も準備されている。つまり正面が開放されていることを除けば、一般的な貸画廊と同程度の空間と設備が整っていると言える。ただし備品倉庫・控え室・給湯流し台・エアコンなどの設備はない。さらに正面玄関が開いた際に外気が直接吹き込み、温度・湿度の変化が激しく、季節によっては西日が差し込むため、作品にとってはあまり良い展示環境とは言えない側面もある。

### ギャラリーHの利用条件

ギャラリーHは本学学生をはじめ教職員から外部者まで、誰でも無料で利用できる。利用期間は月曜から金曜までの1週間で、複数週の利用も認める。ただし土日祝は原則として開催しない。朝9時から夕方6時までのオープンで、利用者が自分でスポットライトなどを点灯・消灯する。搬入は初日の午前中か、前週最終日の前利用者搬出後。搬出は最終日6時からとなっている。できるだけ簡易な手続きで利用できることを旨としており利用希望者は、美術科教員ギャラリーH担当者か、2号館事務室の職員に相談した上で、3号館2階の掲示板にある「ギャラリーH予定表」の空いた週に直接自分で代表者の名前を記入するだけでよい。したがって早い者勝ちとなる。なお、作品が簡単にはずれたりしないよう、しっかり展示すること。キャプションやDM・チラシ・芳名録などは各自で準備すること。展示作品は各自で管理すること。記録台帳(2004年度から実施)に必ず記録すること。本学主催の展示がある場合は、それが優先されることなどの注意事項があり、利用者はそれを了承したものとす。利用者は時期が来たら自主的に搬入出を行う。展示内容についても特に制限はなく、これまで問題となるよ

うな展示は一度もなかった。ギャラリーオープン当初は学生による自主的な発表活動が現在ほど活発ではなく、展示が何も無い週も少なくなかったが、近年は学生が競うように予定を取りあっており、前期のうちから後期の予定までが埋まっていく。特に10~11月は人気が高い。ただし夏期や冬期または春期休業中は、学生による展示はほとんど実施されない。

### ギャラリーHの利用状況

残念ながらオープン当初から数年間は展示内容が記録されておらず、2004年度から美術科 齊藤によって記録を始めた。記録台帳には、利用年月・期間・展覧会名・利用者名・学年・展示内容と、作品の種類・表現技法・寸法などを記録している。また写真数点を撮影し、DMやチラシがある場合はそれも収集している。

記録台帳に基づいて集計した表1・2によれば、2004年度は前期に16回、後期に10回で計26回の展示が実施され、2005年度は前期に16回、後期に15回で計31回の展示が実施された。2004年度の展示総数がやや少ないのは、複数週に跨がる展示が多かったことによる。

表3によれば、1年次生による展示が目立って少なく、2年次生と専攻科生によって実施される展示が多数を占めていることが分かる。しかも1年次生による展示の内、2004年度の1回と2005年度の2回は教員による企画であり、実際には展示に1年次生が関与していないから、1年次生によって自主的に実施された展示は、実質2004年度が3回、2005年度が1回ということになる。このことは、本学美術科では1年次生がコースに分かれて専門的に学ぶのが後期からであること、1年次生は基礎教育の段階であるから展示すべき作品が十分揃わないこと、1年次生がまだ学校にじゅうぶん慣れていないことなどが理由として考えられる。

次に2年次生による展示も回数こそ多いものの、2004年度の8回、2005年度の7回が教員による企画が授業に関連して実施されている。

さらに専攻科生による展示も2004年度の5回、2005年度の4回が教員による企画が授業に関連して実施されている。ただし専攻科生の場合、授業に関連した展示と言えども、ほとんど全てを自主的に計画し実施しており、教員の関与度は低い。

いずれにせよ、2004年度に実施された展示26回中14回(54%)が、2005年度に実施された展示31回中14回(45%)が教員による企画が授業に関連して実施されている。さらにその内、2004年度は前期に12回、2005年度は前期に11回と、ほとんどが前期に集中してい

表3 学年別ギャラリーH利用状況

	2004年度		2005年度	
	利用回数	人数	利用回数	人数
1年次生	4 (15%)	27	3 (9%)	18
2年次生	13 (50%)	128	15 (43%)	117
専攻科生	6 (23%)	59	12 (34%)	78
卒業生	1 (4%)	2	1 (3%)	5
教員	1 (4%)	1	1 (3%)	3
その他	1 (外部講師)	1	1 (美術科研究生)	1
			1 (生活学科生)	16
			1 (外部者)	9
計	26	218	35	247

利用回数、利用人数はのべ数。共同開催でも別々に計上したため、実際に実施された展覧会数と合計が一致しない場合もある。また同一人（グループ）が複数週を利用した場合は1回と計上した。

る。前期は1年次生は入学したばかりであるし、2年次生にしてもようやくスタートを切るような段階であるから、むしろ教員による企画が授業に関連した展示を実施することによって、ギャラリーの賑わいを創出し、利用の啓発に繋がると考えられる。

一方、学生による自主的な展示は、前期末から後期に集中する。展示内容は統一されず様々な作品が混在する傾向が強く、グループ展がほとんどである。しかし2005年度の後期などは、2年次生と専攻科生による個展が連続して圧巻である。なお自主的に展示を実施する学生はリピート率が高く、そうでない学生との格差が大きい。これは公平性という観点からは問題かもしれないが、基本的に自由な発表の場であることを旨とする運営方針から、今のところ特段の対策は考えていない。

### ギャラリーHの展示内容

表1・2によれば、2004・2005年度の出品内容で、のべ回数が最も多いのは、イラストレーションの20回である。次に油彩画の18回、日本画の13回、彫刻の11回、染織・壁面表現半立体がそれぞれ9回ずつ、写真・デッサンやドローイング・立体オブジェがそれぞれ8回ずつ、平面・陶芸がそれぞれ7回ずつ、CGグラフィックスが6回、インスタレーションが4回、水彩画が3回と続く。イラストレーションが多いのは、やはり学生の嗜好が直接的に表れていると見る

べきであるが、絵画などに比べて容易に制作できることも大きな理由であろう。しかもポストカードなど小さなサイズの作品も少なくなく、やや安易な側面も否定できない。次に多い絵画系は授業との関連もあるが、これにデッサンやドローイングを含めると、イラストレーションを超える。彫刻も健闘しているが、これは授業で制作した作品のみを計上しているから、これも抽象立体やオブジェ・インスタレーションなどを加えらるともっと増加するが、出来不出来に格差がある。染織も授業で制作した作品のみを計上してあり、オブジェの一部はフェルトなどによる造形である。写真は制作が非常に簡易であることから、やはり多い。平面作品も授業で制作した作品のみを計上してあり、これもCGグラフィックスなどを含めると増加する。ただしこれも出来不出来に格差がある。陶芸も器のみを計上してあり、オブジェの中の一部は陶芸作品である。

やはり教員による企画が授業に関連した展示にはアカデミックな表現形式の作品が多く、学生の自主的な展示には自由な形式の作品が多い。ただし学生の自主的な展示の場合、完成度が低く展示の体裁がじゅうぶん整っていない場合も少なくない。また、搬入・展示が初日以降にずれ込む場合もあり、自由で自主的な発表の場としての弱点も垣間見える。

### ギャラリーHと授業の関係

表1・2に示すとおり、4月中旬から6月中旬にかけて、日本画・洋画・彫刻・デザイン（平面、染織、陶芸）各コースの2年次生が、順次それぞれの授業で制作した作品を展示していく。この美術科各コース作品展示は、授業と展示を結び付けた最初の企画で、ギャラリーオープン当初から現在まで続いている。当初はギャラリーの空白を埋めるための手段でもあったが、同時に1年次生のコース選択の一助とする目的も持つ。本学美術科は入学後、一定の基礎実習を経た後、各自の希望や適性に合わせてコースを選択していく方法を採用している。そのため、1年次生が各コースの内容を十分理解することが重要で、言葉だけでは説明できないそれぞれの魅力を、この展示によって視覚的に理解させることができる。また展示する側の2年次生にとっても制作の励みになり、あらかじめ組まれた展示予定が締め切りとなり、良い意味で適度なプレッシャーとなる。原則として各コースとも全員が出品する。ただしこの展示では、キャプションなどの準備までは学生に委ねて

いない。なお、同時期にデザインコース1年次生の授業作品展も実施しているが、これは前年度末に制作された作品の選抜展であり若干意味合いが異なるが、コース展示に組み込んである。

次に専攻科の展示計画研究（2005年度からは展示研究Ⅰ）では、最初からギャラリーHの存在を前提とした科目設定となっている。この科目では作品の制作ではなく、ギャラリーでの展覧会のための、準備段階から運営までのすべてを学生自身によって計画し実施していくことを目標としている。そのため、キャプション・チラシ・DMなどの制作はもちろんの事、実施するグループ展の企画そのものから検討していく。この科目は2002年度に専攻科が発足して以来継続しているもので、教員は最低限の指導に止めているが、毎回完成度の高い展示で、1・2年次生に対しての良い見本ともなっている。なお2005年度から展示研究Ⅱでは、その考え方をさらに発展させ、市内の貸画廊で展覧会を開催することが条件となっている。

その他2年次生の授業作品展や専攻科の表現研究Ⅰ・Ⅱさらに造形研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲなどにおいても、制作された作品の展示が適宜実施され、ギャラリーHは今や、本学美術科の教育に無くてはならない存在となっている。

さらにこれまで教員のコレクション展や、教員の個展・グループ展など数多く開催し、鑑賞面からも教育的効果をあげるため、様々に取り組んできた。中でも教員と学生が共同で実施する、授業とは切り離れた形でのグループ展は、教員側からしかけることによって、日頃おとなしい学生にも参加のチャンスを作ることができたり、授業以外の取り組みとして学生に充実した体験を提供することができるなど高い効果を生み出している。

### ギャラリーHについてのアンケート調査

2004年度と2005年度に、本学美術科1年次生を対象にギャラリーHに関するアンケート調査を実施した。2004年度は1月31日～2月7日にかけて49名から、2005年度は12月20日～1月24日にかけて58名からの回答が得られた。質問は大きく4つのグループに分けた。第1質問群はギャラリーの認知度や利用経験について、第2質問群はギャラリーの必要性や存在意義について、第3質問群はギャラリーで作品を発表する意欲について、第4質問群はギャラリーの改善についてである。

第1質問群は、各質問に対して「はい」か「いいえ」のどちらかを選択する形式である。集計結果（表4）によれば、ギャラリーの存在は合計で93%と高く認知されている。これはギャラリーHが3号館玄関正面にあるという立地に起因していると言える。ただし美術科以外の学生、特に大学の学生にとっては必ずしも来やすい場所とは言えない。少なくとも、学内で広く公開し発表するための場とするなら、その存在と展示内容についてもっと学内広報すべきである。

ギャラリーの名称が「アッシュ」であることの認知度は合計で63%。本学美術科では勿論、新入生に対して、オリエンテーションなどを通じてギャラリーHについて説明しているが、十分ではない。

さらに「H（アッシュ）」の意味の認知度は合計9%と極めて低いが、これについてはほとんど説明がなされていないのが現実である。

無料で利用できることについての認知度も合計79%と決して低くないが、やはり十分ではなく、もっと徹底して周知すべきである。なお、1年次生の利用者が少ないことは、先述のとおりである。

表4 ギャラリーHに関するアンケート調査「第1質問群」集計

質 問	2004年度生		2005年度生		合 計	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
ギャラリー・アッシュを知っていますか？	45(92%)	4(8%)	54(93%)	4(7%)	99(93%)	8(7%)
ギャラリーの名前が「ギャラリー・アッシュ」であると知っていましたか？	23(47%)	26(53%)	44(76%)	14(24%)	67(63%)	40(37%)
ギャラリー・アッシュの「アッシュ」とは「比治山」「広島」「人間」等の頭文字「H」のフランス語の発音であると知っていましたか？	3(6%)	46(94%)	7(12%)	50(86%) 未記入1	10(9%)	96(90%) 未記入1
ギャラリー・アッシュは、本学学生なら誰でも無料で利用できることを知っていましたか？	38(78%)	11(22%)	46(79%)	12(21%)	84(79%)	23(21%)
今までに、ギャラリー・アッシュを個展やグループ展で利用したことがありますか？	6(12%)	43(88%)	2(3%)	56(97%)	8(7%)	99(93%)

美術教育における学内ギャラリーの存在意義と役割に関する報告

表5 ギャラリーHに関するアンケート調査「第2質問群」集計

質 問	2004 年度	2005 年度	合計
美術科に必要な施設だ。	40	53	93(87%)
美術科に必要ではない施設だ。	0	0	0(0%)
好きな施設だ。	30	41	71(66%)
嫌いな施設だ。	0	0	0(0%)
良い作品発表の場だ。	33	53	86(80%)
あまり良い作品発表の場ではない。	1	2	3(3%)
展示があると、つい足を止めて観てみたくなる。	35	50	85(79%)
展示があっても、特に観たくない。	3	1	4(4%)
あってよかった。	32	41	73(68%)
なくてもよかった。	3	0	3(3%)
展示すること自体に教育上の意味がある。	19	31	50(47%)
展示すること自体に教育上の意味はない。	1	2	3(3%)
いつも展示が楽しみだ。	26	33	59(55%)
特に展示が楽しみではない。	5	3	8(7%)
その他	2	7	9(8%)

第2質問群は、「ギャラリー・アッシュについてどう思っていますか?」という問い掛けに対して、その他自由記述を含め15の選択肢を設け、各選択肢に対して「そう思う」場合に○をつける形式で、複数解答可としている。なお各質問は二つずつがペアになっており、各ペアは互いに相反する質問になっている。集計結果(表5)によれば、いずれの質問に対しても、ポジティブ側の意見が圧倒的で、ネガティブ側は少数であり、ギャラリーHの存在意義が十分に学生に認識され理解されていると考えていだろうか。なお、その他の自由記述には「自分もいつか展示したい」(3名)、「誰でも無料で使用できるのは魅力的だ」、「おもしろい」、「好きな作品なら立ち止まって見る」(2名)、「自分にとって展示をした事実が自信になる」、「立地が悪い」などである。

第3質問群は、「他の人の展示を観てどう思いましたか?」という問い掛けに対して、その他自由記述

表6 ギャラリーHに関するアンケート調査「第3質問群」集計

質 問	2004 年度	2005 年度	合計
自分も制作に頑張ろうと思った。	35	43	78(73%)
自分も制作に頑張ろうとは思わなかった。	1	1	2(2%)
自分もここで個展やグループ展をやりたい。	23	40	63(59%)
自分はここで個展やグループ展をやりたいくない。	1	1	2(2%)
皆に作品を観てもらうことに意味があると思った。	31	37	68(64%)
皆に作品を観てもらっても意味がないと思った。	1	1	2(2%)
その他	2	3	5(5%)

を含め7の選択肢を設け、各選択肢に対して「そう思う」場合に○をつける形式で、複数解答可としている。なお各質問は二つずつがペアになっており、各ペアは互いに相反する質問になっている。集計結果(表6)によれば、いずれの質問に対しても、やはりポジティブ側の意見が圧倒的で、ネガティブ側は少数であり、ギャラリーHの存在が、学生の制作意欲を喚起するための一助となっていると考えていだろうか。なお、その他の自由記述には「自分もたくさんの人に見てもらい、賛否両論を聞きたいと思った」、「凄い作品ばかりだと思った」(2名)、「身内意識が強すぎる」、「ヴィジュアル系(中略)作品はあまり好きではない」などの意見があった。

第4質問群は、「ギャラリー・アッシュの今後についてどう思っていますか?」という問い掛けに対して、その他自由記述を含め16の選択肢を設け、各選択肢に対して「そう思う」場合に○をつける形式である。この質問群は、最初の質問が現状維持を肯定する意見で、それ以下がなんらかの改善を希望する意見になっている。また上から2番目から9番目までの質問が設備に関する意見。10番目と15番目の質問が施設の増設に関する意見。11番目から14番目の質問が運営に関する意見となっている。集計結果(表7)によれば、設備に関する意見もあるものの、全体として施設の増設・増床と運営に関する意見が多いことがわかる。中でも「もっと学外の人に観てもらえる工夫をすべきだ」という意見が最大の55%となっている。このことについては、本学美術科ではこれまで、ほとんど検討してこなかった。これは第3質問群の結果からも言えることだが、ギャラリーHが学外からは

表7 ギャラリーHに関するアンケート調査「第4質問群」集計

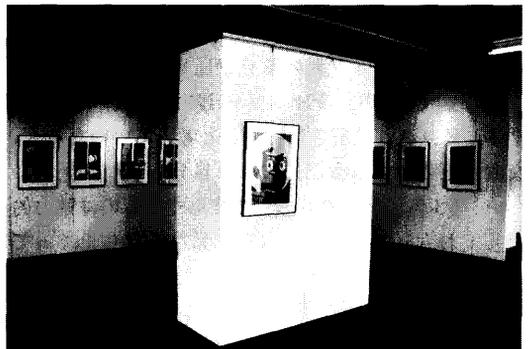
質 問	2004年度	2005年度	合計
いまのままで満足だ。	11	10	21(20%)
もっと壁面をきれいにすべきだ。	7	11	18(17%)
もっと広くすべきだ。	19	23	42(39%)
もっと天井を高くすべきだ。	6	13	19(18%)
壁面が足りないから、可動式パネルなどを追加すべきだ。	5	8	13(12%)
ベンチなどを置いてくつろげるようにすべきだ。	6	13	19(18%)
正面が解放されすぎなので、もう少し閉鎖的にすべきだ。	2	5	7(7%)
西日が当たるので、日除けを設置すべきだ。	7	9	16(15%)
湯茶のサービスができるようにすべきだ。	3	11	14(13%)
1箇所だけでなく、複数のギャラリーがあるべきだ。	20	32	52(49%)
学生作品だけでなく、先生方の個展を開催すべきだ。	21	37	58(54%)
学生作品だけでなく、著名な作家の個展を開催すべきだ。	15	15	30(28%)
もっと学外の人に観てもらえるような工夫をすべきだ。	22	37	59(55%)
土日も開放すべきだ。	9	16	25(23%)
大学の敷地内ではなく、街に本学経営のギャラリーを持つべきだ。	22	25	47(44%)
その他	2	2	4(4%)

来にくくとも学生の身近に存在し、日頃から親しんでいるからこそ刺激になり創作意欲を喚起させるのであって、これが大学キャンパス外のどこか市中心部にあると、かえって疎遠になってしまい、本来の目的を達成できなくなってしまう。つまり学内ギャラリーはあくまで美術教育の一貫として、その体験を最大の目的としているから、基本的に学外からの来客を想定していないのである。したがって、あえて積極的に集客する努力はしていない。しかしせっかく発表を試みた学生にしてみれば、より多くの人に観てもらいたいと願うのが普通であろう。しかし学内施設であるため、セキュリティの問題からも、あまり野方図に集客することには問題がある。せいぜい出品者の家族や友人に来てもらう程度が現実的であろう。その場合14番目の

質問にもあるように、土日の開放が問われるのだが、それも施設設備の管理から難しい面がある。その意味からも市中心部に大学経営の画廊を持つことは一つの理想であるが、採算性など経営的な判断が必要になってくる。むしろ学外で発表したい場合には、やはり民間の貸画廊や美術館・公共施設の展示スペースなどを利用するのが現実的であり積極的な学生は以前から、そうしている。

施設の増設・増床も簡単ではないが、現在、既に学生会館1階ロビーに展示スペースが設けられている。しかし美術作品の展示にふさわしい壁面が存在しないため、自立式衝立てなどを使用するか、天井から吊り下げて展示するような方法しかなく、展示できる作品が限定される。またロビーであるため空間が開放的すぎて、落ち着かないなど、あまり美術作品鑑賞には向いていない。ただし、多くの学生が通行する場所であるため、露出度は高い。

次に教員の作品展示であるが、先述したとおり、ギャラリー設置当初は努めて教員による展示を実施していたが、近年は減少している。それは、そうするまでもなくギャラリーの予定が埋まるためでもあるが、学生の希望がこれほど多いなら、なんらかの形で教員による個展やグループ展をより積極的に実施すべきであろう。ただ、民間の貸画廊や美術館・公共施設の展示スペースなどで教員が発表する場合でも、実際には学生があまり来ないという現実もある。なお、その他の自由記述には「広報不足」、「それぞれの展示内容がもっと充実していればと思う」、「学内では限られた人しか見てもらえず、身内に見てもらっただけの自己満足で終わってしまう」、「ギャラリーの存在を広くアピールすべき」などあった。身内だけに披露して自己満足に終わることは確かであるが、先述したとおり本来の目的は別のところにある。もとより芸術には、そういう側面があることは否定できないし、市中心部



筆者によるギャラリーHでの個展 (写真 齊藤)

の貸画廊にしても、入場者数は極めて少ないという現実がある。しかしギャラリーHで発表したことのある学生が、次に市中心部の貸画廊でグループ展を開催するケースが多いことから、まずは気軽に利用でき、まがりなりにも展示・発表の一通りを体験できる学内ギャラリーの存在意義は大きいと言える。

#### おわりに

ギャラリーHが誕生して既に9年目を迎えている。その間、様々な展示を見てきたが、それらは本学美術科の教育に、よく寄与してきたといえるのではないだろうか。全国に、美術を専門とする大学・短大は少なくないが、これほど自由でこれほど活発な学内ギャラリーを他に知らない。確かに水準の低い作品もあり、基本的な展示作法がなってお

らず、ずいぶん乱暴な展示の場合もある。しかし時に、授業の課題では決して見せることのない学生作品の意外な輝きに驚かされることもある。そんな時、美術教育とは何なのかを改めて考えさせられてしまうのだ。もし、学生の能力を発見し延ばすことが我々の役目であるなら、アカデミックな方法だけに固執するのは適当ではない。その欠点を補う意味でも自由に利用できる学内ギャラリーの存在は貴重であるとは言えないだろうか。

ところで近年、壁面のビニールクロスの傷・破れや床のタイルカーベットの汚れなどが目立つようになってきた。スポットライトの数台も破損したため廃棄した。ギャラリーHがオープンしてから一度も補修などしてこなかったが、そろそろリニューアルの時期が近づいてきているのかもしれない。

(受理 平成18年9月10日)

齊藤克幸

**Abstract**

A Report of the Intramural Gallery in Fine-Arts Education

Katsuyuki SAITO\*

Gallery H is an intramural gallery made in this university in 1997. The circumstances, the outline, and the conditions of use when Gallery H was created are explained. Also an analysis based on the exhibition record in fiscal years 2004 and 2005 is given, as well as results from a questionnaire that was conducted.

(Received September 10, 2006)

---

\*Department of Fine Arts